

ぼくとアカ

奄美市立奄美小学校 二年 のした そうし

ぼくにはひみつがある。きつとぼくだけが知っている、ぼくだけのひみつ。ちょっとだけ教えます。

「そうし、四月からあまみ大しまにすむことになった。」

もうすぐ一年生がおわるころ、お父さんがしんぱいそうなかおで言った。ぼくは、かなしくてなみだがたくさん出た。だって、こくぶには小さいころからなによしの友だちもいっぱいいる。みんなといっしょに二年生になることを、とつてもたのしみにしてきたのに。

「だいじょうぶよ。きつと、あまみもたのしいよ。」
お母さんが、にっこりわらってそう言った。

四月一日、はじめてあまみ大しまについた。空も海もキラキラかがやく青色で、なんだかわくわくした。海でおよぎたいなあ。そうおもった時、お友だちのかがあたまにうかんで、やっぱりさみしくなった。

新しいおうちへのおひっこしがわわって、あまみではじめての朝をむかえた。

「キョロロロ、キョロロロ。」
なんだかふしぎな鳴き声をする。

「おっ、アカシヨウビンが鳴いているなあ。あまみに

すむ、とてもきれいな鳥だよ。」

お父さんが言った。アカシヨウビンって、どんな鳥だろう。きれいな鳴き声だなあと、ぼくは思った。

その時、バサバサという音でぼくは目がさめた。すると、目の前に真っ赤なチューリップの花のような色をした鳥が一ぴきいた。びっくりしたぼくは、お父さんとお母さんをおこそうとしたが、声がでなかった。すると、その真っ赤な鳥が、

「ぼく、アカシヨウビンのアカ。夜のさんぽに出たら、おうちが分かんなくなっちゃった。」

と言って、一つぶなみだをながした。なんだかわいそうだったので、ぼくのつくえの上にタオルをおいて、
「もうまっくらだから、あしたの朝までここで休みなよ。」

と言って、しばらく休ませることにした。

次の朝、お父さんとお母さんにアカのことを話そうとしたが、ぼくのつくえの上にねむっている、真っ赤な鳥にまったく気づいていないようだった。ぼくには分かった、アカはぼくにしか見えないんだと。目をさましたアカは、とてもおなかをすかしていた。ぼくは、

「ここでまっついて。」
と言って、ぼくの朝ごはんのパンを一切れあげた。そ

して、アカに、

「ぼくは、そうし。おととい、この家にひっこしてきてんだ。よろしく。」

と言つて、アカを手にした。お昼にアカといっしょに、アカのおうちをさがしたけれど、アカのおうちはなかなか見つからない。つぎの日も、つぎの日も見つからなかった。

アカがぼくの家に來てから、一しゅうかんがたった。かぞくで海に行く時も、学校へもアカはついてきた。けれど、だれ一人アカに気づかない。友だちも先生も気づいていない。アカにとっては、ぼくはたった一人の友だちなのだ。

アカは、あまみのことをたくさん教えてくれた。海にすむきれいな魚のことも、けんむんっていうふしぎなようかいのことも。それから、ハブっていう、きけんだけど、森をまもるへびの王さまのことも。ぼくは、一日一日あまみのことにくわしくなつて、あまみが大ききになつてきた。

夏休みになつた。八月の中ごろ、ぼくはしばらくかごしまにいくことになつた。アカもさそつたけれど、アカは、

「お母さんがきつとさがしているから、あまみにいるよ。」

と言つた。ぼくはちよつぱりさみしかつたけれど、おみやげをかつてくることをやくそくして、かごしまへ行つた。

八月のおわりに、あまみへ歸つてきた。アカに早くあいたいとおもつて、名前をよんでさがした。けれど、アカはどこにもいなかった。

すると、ぼくのつくえにキラツと光る石のようなものと紙きれが一まいあつた。

「ぼくの親友、そうしへ。お母さんとあうことができたので、森のおうちに帰ります。とてもさみしいけれど、そうしとお友だちになれてうれしかったよ。ぼくの宝もののやこう貝をプレゼントします。そうしのこと、ずっとわすれないよ。アカより。」

ぼくは、なみだがとまらなかつた。ピカピカ光るやこう貝をにぎりしめて、ずっとないた。けれど、アカだつてお母さんといっしょなのが一ばんだ。だから、がまんすることにした。

あまみで一ばんさいしょにできた友だち、ぼくの大すきなアカ。ぼくは、ずっとわすれないよ。アカにまけないくらい、あまみのことをべんきようして、アカのすむ森にあいにくよ。

ぼくはそう心にきめて、ピカピカ光るやこう貝をギョツとにぎりしめた。